教科等研究会（小学校社会部会）
令和５年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

持続可能な社会の創り手を育てる社会科学習

２　研究経過

第１回			第２回			第３回			第４回		
期日	人数	場所	期日	場所	講師	期日	場所	授業者	期日	場所	授業者
6/9	24 人	飯野	8/8	飯野	書川欣也	12/4	龍野	大野なつき	1/26	高木	山本　大

３　研究の概要

(1) 研究の内容

①　研究主題設定の理由

○　本研究部会のあゆみ

本研究部会では、学習指導要領をもとに、主体的に調べて考える学習活動及び児童の問いを大切にした問題解決的な学習を進めてきた。特に言語活動を大切にした学習の取組は、多角的な思考力や判断力、表現力を育成する上で大きな成果をあげてきたと考えている。

今年度もこれまでの取組の成果をふまえ、上益城郡教科等研究会の全体テーマも考慮した上で、社会科における言語活動の充実を図りながら、児童が習得した知識や技能をもとに思考・判断し、表現することのできる授業づくりを更に充実させていきたいと考えた。

また、本研究部会では、「生き方を求め合う」や「未来を育む人間を育てる」などにあるように『人間の生き方に迫る』という点にこだわって教材を開発したり授業展開を考えたりしてきた。人と出会い、その生き方・考え方に触れることは、より教材が身近な問題になるだけでなく、社会科において必要となる概念形成を目指すためにも今後も授業づくりのなかで大切にしていきたい。

○　これからの社会科学習に求められるもの

「知識基盤社会（新しい知識、情報、技術が政治、経済、文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会）」と言われる時代がはじまり、とりわけ、これまでの「物の見方・考え方」の変換を伴うことの多くなる社会では、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断がいっそう重要になると考えられるようになった。これから求められる「生きる力」とは、社会が日進月歩で変化しつつある中で、社会に主体的に対応し、問題解決に取り組める力であり、それはそのまま求められる人間像でもある。

学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」の実現であるが、このことは、社会科においては知識・技能を活用することで思考力・表現力等を育成し、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養を目指すものであり、それらは問題解決的な学習による学びの必要性を示唆している。

また、国内外の学力に関する調査結果からも、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に、徐々に改善されつつあるものの、やはり課題が考えられることが明らかとなっている。今後も習得した知識や技能を基に、活用する力を培うことが、今日的な教育課題である。

②　研究の視点

視点１　「人間の生き方に迫ることのできる教材開発」

上益城郡がこれまでこだわって「学び」にしてきた部分である。学習指導要領のねらいを達成するために、何を学ばせるのか、自分の生き方にどうつなげていくのかを明確にし、地域人材を活用して人間の生き方に迫る。

社会科は、人間の営みを通して人間の生き方に学び、自らの生き方を考えるという本質を持つ教科である。そのため、授業づくりでは、学習の中で人間の生き方にふれ、何を学ばせるかに重点をおくことが大切となる。

本研究では、ねらいを明確にし、日常生活に密着した内容から入るなどの工夫を行いながら、ゲストティーチャーをはじめ様々な手立てで、人の生き方や考え方を学習したり、人材を活用したりすることが教材の本質につながると考えた。

上益城では、熊本地震において、本県最大級の震災を経験することとなった。そこには、復興やきずなを取り戻そうとする人々の姿や、その現実に主体的に対応し、問題解決に取り組もうとする人々の姿があった。そこにも、社会科で目指す人間像があった。そこで、本研究では、それらの教材化も同時に行っていくこととした。

視点２　「主体的・対話的で深い学びを実現する学習活動」

主体的な学びについては、児童が学習課題を把握し、その解決への見通しを持つことが必要である。そのためには、単元などを通した学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、児童の表現を促すようにすることなどが重要である。

対話的な学びとして、実生活で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決していく姿を調べたり、話を聞いたりする活動を設定していく。

これらを踏まえ、深い学びの実現のために、「社会的な見方・考え方（視点や方法）」を用いた考察、構想（選択・判断）や説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追求したり解決したりする活動を行っていく。

視点３　「児童の学びを見取り、確かな力をつける評価」

評価活動では、教師が児童のよい点を励まして学習意欲を高めたり、児童一人一人の学習目標の達成状況をより正確かつ効果的に把握したりすることを大切にし、これまでの指導及びその成果を振り返り、今後の指導改善に生かしたり、多様な達成状況の児童に対して個別指導を行ったりする目安とする。

本研究部会では、目指す児童像に即して、児童の発言やノート、振り返りなど、一時間一時間の学習活動の中から、児童の変容を見届けていく。そして、児童一人一人の学習目標の達成状況をより正確かつ効果的に把握していく。

そのために、現実かつ継続的評価が可能となる様々な方法を検証するものとする。また、児童の取組や育ちを刻々と見取り、励ましながら自己評価や自己変容の記録、児童同士による相互評価等を充実させたい。

(2) 成果と課題

【成果】

○　第２回の研究会では、熊本市教育センターの書川欣也指導主事を講師として招き、「社会科の授業づくり」と題し、講話をいただいた。その中で、人・もの・場所にこだわって、『見つける』に心血を注ぐことを大切にした具体的な授業の作り方を示していただいた。このことは、「誰もができる社会科学習」を目指す本研究会にとって学び多き研修となった。

○　第２回の研究会では、杉堂断層の見学も行った。会員が実際に現地に足を運び、自らの目で見て、感じて、説明を聞いて、改めて熊本地震の被害の大きさ、これから社会の授業を通して風化させずに伝えていくことの大切さを再確認できた。

○　第３回の研究会は、６年生の歴史分野で上益城（甲佐地区）の地域素材である「陣の内城址」を扱った学習内容であった。戦国の世（織田信長、豊臣秀吉の世の中）は、大昔のこと、遠く離れた遠方のことと捉えがちになってしまうが、小西行長を通して豊臣秀吉と自分達の住む地域との関連性を明らかにしたことで、児童にとってより身近なものとなり、思考が深まる授業となった。地域素材の発掘と、教材化により、本研究会の大きな財産となった。

○　第４回の研究会では、４年生の県内の特色ある地域の様子として、荒尾市の小代焼を扱った学習内容であった。動画視聴を通して、小代焼に携わる職人さんの思いに触れることができ、児童の思考の深まりにもつながった。また、地域にある窯元の方の話を聞くことで、学習内容がより身近なものとなった。授業者が直接足を運び、情報を集め、裏付けされた事実を土台とした授業の在り方は、部会員にとっても大変参考となった。学習を通して、本部会がこだわってきた人間の生き方に迫る教材開発を学ぶことができた。

○　地域素材の発掘、学習内容が児童にとってより身近なものと感じることのできる単元デザインを踏まえた学習構想案を２本作成することができたことは大変意義深く、部会員の学びの場となった。同時に本研究会の大事な財産となった。部会員に発信するだけではなく、各校で社会科の構想案を広めてもらうことを伝えたことで、郡内の社会科の授業力アップにつながるものと考えている。

【課題】

● 学習指導要領の趣旨や社会科の本質を踏まえた上で、資料の効果的な活用、上益城の地域素材･人材を活用した人間の生き方に迫る授業づくりをさらに進めて行く必要がある。また今後も、誰にでもできる（やりたくなる）社会科の授業づくりを目指し、郡内に広めていきたい。（視点１）

● 「主体的・対話的で深い学びを実現する学習活動」を実現するためには、単元のゴール（学習したことを、どのように表現していくのか）をさらに明確にしておく必要がある。この単元のゴールをどのように設定し、主体的・対話的で深い学びができる学習内容を実現し、児童の表現力につなげていくのか、さらに工夫していく必要がある。（視点２）

● ２本の研究授業の中では、児童のノートを中心とした評価活動を実施することはできたものの、一人一人の児童の変容をさらに見届けていくための手立てが必要である。また、評価を指導改善に生かす研究をさらに進めていく必要がある。そのためにも、評価の在り方をさらに協議していく必要がある。（視点３）

４　実践事例

(1) 授業の概要

単元名　６　県内の特色ある地いきのようす

「伝統的なぎじゅつを生かした地場産業がさかんな地いき」

（わたしたちの熊本㊦　熊本県小学校教育研究会社会科部会）

【自評】（御船町立高木小学校　　山本教諭）

○　導入部分は、小代焼の作り方の振り返りをした。そこを子供たちと確認した後、電気窯、登り窯の紹介をして、登り窯の大変さを子供たちに感じさせたかった。

○　登り窯で焼かれている方の思いを子供たちは、よく考えることができていた。

○　ＩＣＴの活用（スカイメニュー）が難しく、効果的なものとはならなかった。

○　インタビューの動画は、しっかりと観ることができていた。一同窯の高田先生のインタビューでは、電気釜の良さも紹介してもらい押さえることができた。

【指導助言】（飯野小学校　　島田部会長）

○　授業者の思いがよく伝わる授業だった。

○　インタビュー動画の中の小代焼の作り方へのこだわりは、山本先生の授業づくりにもつながっている。

○　授業中で、子供たちのつぶやきに対し、「うんうん」と頷く場面があり、先生の優しさを感じた。

○　「型にはまった授業」ではなく、今回の先生の授業は、「生きた授業」となっていた。

○　小代焼の窯元に実際に足を運ばれたこともとても大きい。社会の授業では、とても大切。

○　１２月の大野先生の授業、そして、今回の山本先生の授業は、社会部会の大きな財産となる。

(2) 学習構想案（要約版）

ア　単元の目標

（１）熊本県の地理的環境の特色、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、資料を通して、必要な情報を調べ、まとめる技能を身に付ける。

（２）特色ある地域の人々の活動や産業の歴史的背景、人々の協力関係などに着目して問いを見出し、その地域の人々の活動や産業の発展を関連付けながら県内の特色を考え、表現している。

（３）特色ある地域の人々の活動や産業の歴史的背景、人々の協力関係について学習を深め、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

イ　単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿･期待される姿）

小代焼を取り巻く人々の努力や思いを教科書や資料、自分達が調べたことから読み取り、自分達の住んでいる熊本県に対する誇りや愛情を高めている児童。

ウ　単元を通した学習課題

小代焼を残していくための人々の活動について理解し、その活動に携わる地域の人たちの思いを考えよう。

エ　本単元で働かせる見方･考え方

小代焼に携わる人々の活動や努力について知ることを通して、思いや願いを考える。

オ　単元の指導計画(7時間扱い)

	時数	学　習　活　動	評価の観点
1	①	○荒尾市に小代焼という伝統工芸品があることを知る。 ○小代焼の茶碗と地元の窯（一道窯）の茶碗、１００円ショップの茶碗の違いを見つける。 ○なぜ、荒尾市で小代焼が作られてるのかを予想する。	態－①
2	⑤ 【本時】	○小代焼がどのように作られているのかを知る。 ○小代焼の特徴や良さについて知る。 ○小代焼がなぜ荒尾市でさかんに作られるようになったのかを資料をもとに考える。 ○なぜ、ふもと窯では、登り窯を使って焼いているのかを考える	知－① 知－① 思－① 思－②
3	①	○班ごとに分担し、小代焼についてのスライドを作り、学習のまとめを行う。	思－②

カ　本時の学習

〈目標〉

◎　なぜ、ふもと窯では、登り窯を使って焼いているのかを資料をもとに考えている。

〈展開〉

過程	時間	学習活動	指導上の留意事項
導入	10分	**1　前時までに学習した子を振り返る。** **「小代焼はどのようにして作られていましたか？」**	○教室の掲示やノートなどを活用しながら振り返りを行い、既習事項の確認をする。
		2　電気窯と登り窯を知る。 **「電気窯と登り窯、どちらで焼かれていると思いますか？」**	○電気窯と登り窯のことについて、比較させながら紹介をすることで、登り窯の大変さが伝わるようにする。 ○どちらで焼く方がら楽なのかを尋ね、ふもと窯ではどちらの窯を使用されているのかを予想させる。
		【めあて】なぜ、ふもと窯では、登り窯で小代焼を焼くのかを考えよう	
展開	25分	**3　ふもと窯では、なぜ登り窯で小代焼を焼いているのかを考える。** **「電気窯の方が楽なのに、なぜ登り窯で焼かれているのでしょう？」**	○荒尾市のふもと窯では、登り窯で焼き物を焼かれていることを紹介し、登り窯で焼き物を焼く理由を考えさせる。
		①　一人で考える。 **②　ペアで交流する。** **③　全体で交流する。**	○全体交流につなげるため、SKYMENU の学習ノートに自分の考えを記入させる。 ○全体活動において、子供たちの考えのキーワードに線を引き、子供たち自身の言葉からまとめに繋げられるようにする。
		4　なぜ、登り窯を使って焼き物を焼くのか、ふもと窯の方のインタビュー映像を見る。	○なぜ、登り窯を使って焼き物をされているのか、理由や携われている思いなどについて、インタビューした映像を見て確認する。
まとめ	10分	**5　高木地区の一道窯の高田先生のインタビュー映像を見る。** **「一道窯の高田先生は、どんな窯で焼き物を焼かれていると思いますか？」**	○高木地区の一道窯の高田先生は、電気窯で焼き物を焼かれていることを紹介し、電気窯のよさについてもしっかりと押さえておく。
		6　本時の振り返りを行う。	○振り返りの観点を提示し、本時の学習の振り返りをスムーズにできるようにする。 ○振り返りの内容を発表させ、次時の学習につなげられるようにする。